

学習者が不確実な未来に向き合うことを支援するための教師の役割： ベケットの UxD に着目して

The Role of Teachers in Supporting Learners to Face an Uncertain Future: Focusing on Beghetto's UxD

天野 慧^{*1, *2}

Kei Amano^{*1, *2}

^{*1} グロービス経営大学院, ^{*2} 熊本大学大学院教授システム学専攻

^{*1} Graduate School of Management, GLOBIS University,

^{*2} Graduate School of Instructional systems, Kumamoto University

Email: kei.amano@globis.ac.jp

あらまし：教育の目的の一つは、学習者が不確実な未来に備えられるようにすることであり、授業においても学習者が不確実な状況に向き合う力を育成することが重要である。しかし、不確実な状況に慣れない学習者にとって、心理的安全性が確保されない懸念もある。本稿では、Beghetto (2024) の UxD を紹介し、学習者が不確実な未来に向き合う力を育むことを支えるための教師の役割を整理する。さらに、この枠組みが既存の教育実践の省察にどう活用できるかを考察する。

キーワード：UxD モデル、不確実性、デザイン、エージェンシー

1. はじめに

学校教育の目標の一つは、学習者が未来に備えられるように準備することである。未来には複数のシナリオがあり、予測とは異なることや思い通りにならないことが生じる可能性がある。したがって、学習者にはこうした不確実な状況に向き合う力が求められる。しかし、一般的な学校教育では、体系的な知識やスキルの習得に焦点を当てた授業が中心であり、不確実な状況に向き合う訓練は十分ではないことが多い。不確実な状況に慣れない学習者にとって、心理的安全性が確保されない懸念がある。

こうした背景を踏まえて、本稿では、Beghetto (2024) の Uncertainty x Design (UxD) に着目し、学習者が不確実な未来に向き合う力を育むことを支援するための教師の役割を明らかにする。UxD は、不確実性に対応できる創造的な学習者を育成するための枠組みである。本稿では UxD で想定される不確実な状況に向き合う力と、それを支援する教師の役割や学習支援のあり方を整理する。さらに、この枠組みを用いた既存の教育実践の省察にどう活用できるかを考察する。

2. 不確実な未来に向き合うことを支援するための教師の役割

2.1 不確実な未来に向き合う力

UxD において、不確実な未来に向き合う力とは、学習者が自身とできるだけ関係性が遠い他者の問題解決に貢献できるようになることである。自分が相手の問題解決のために最善と考えたアイデアでも、問題の当事者である他者がどうそれを評価するかは

わからない。こうした他者性を学習活動へ意図的に組み込み、学習者が不確実性に向き合いながら創造性を発揮するきっかけを創出することが狙いである。

他者への貢献のレベルは、図 1 に示すように 4 段階である。最も不確実性が低いのは「自己」レベル（学びが学習者だけで自己完結）、次いで「対象とする聴衆レベル」（教室内のほかの学習者や教師へ貢献すること）、さらに「広範なコミュニティレベル」（近隣住民や自治体への貢献すること）、そして最も不確実性が高いのが「未知&未来の聴衆」（未だ会ったことがない人たち、将来の潜在的な聴衆へ貢献すること）である。学習者が「自己」に留まらず、できるだけ関係性が遠い他者へと目を向けることがめざされている。

2.2 教師の役割

UxD では、学習者が自らの未来を切り拓くために、学習プロセス全体でエージェンシーを発揮することが求められる。教師が一方的に指示を出すのではなく、学習者自身が活動をデザインすることが重要であると位置づけられている。学習者が自分で自分の学びをデザインする主体であり、教師はそれを支えるファシリテーターやコーチとしての役割が期待されている。

一方で、学習プロセスに「自己」以外の他者が関わることで、学習者の思い通りに進まない場面が生じる。たとえば、自分のアイデアが否定されたり、相手の都合に学習スケジュールを合わせる必要があったりする。学習者はこうした否定的な要素を過大評価するネガティブ・バイアスが生じてしまいがち

である。少しくまういかなかったことでも、問題点を過大評価し、他者との関わりに消極的になり、学習活動を「自己」に閉ざしてしまう傾向がある。

ベケットによれば、教師や専門家の役割は、学習者が「自己」から他者へと視点を広げられるよう支援することである。加えて、否定的な要素に目を向けがちな学習者が感情をうまく制御できるように支援することも重要である。特に、学習者は表1に示す3つの要素を否定的に捉えやすい。教師は、これらに対して学習者が異なる見方をできるように働きかけることが求められる。日頃から学習活動を観察し、否定的な点に目を向けがちな学習者のよくできている点に光を当てたり、課題の解決に向けて建設的なアクションを提案したり、教師が新たな視点を提供する必要性が指摘されている。

表1 UxDにおける学習者の懸念

(1) 自信：自分はこれができるか？
(2) 価値：私はこれをやるべきか？
(3) メリット：リスクや努力に対してどれだけ見返りがあるか？

3. 考察とまとめ

本稿では、ベケットのUxDに着目し、学習者が不確実な未来に向き合う力を育むための教師の役割は以下の2点であることを確認した。

1. 学習者の取り組む問題の貢献レベルを、できるだけ「自己」から、学習者自身とは関係性が遠い他者へと視点を広げられるように働きかけること
2. 不確実な状況に向き合う学習者が否定的な側面ばかりに眼を向けすぎないように、新たな視点を提供すること

ベケットは、各授業の目的や狙いが異なることを前提としながらも、教師がすべての授業において何らかのかたちでUxDを組み込むことを推奨している。たとえば、知識やスキルの習得を中心とした授業でも、可能な範囲で他者貢献の視点を加えることが、学習者が不確実な未来に向き合う力を育成する第一歩となる。一方で、進め方の自由度が高い探究活動は、学習者にとって心理的負担が大きくなりすぎることがある。そのため、教師は学習者が不確実性を肯定的に受け止められるよう支援する必要がある。

本稿で整理した不確実な未来に向き合う力を支援する教師の役割という視点は、既存の教育実践が学習者にとって有効な学びの環境を提供できているかを省察するうえで、有効な観点となるのではないかと考える。

参考文献

Beghetto, R. A. : “Uncertainty X design: Educating for possible futures”. Cambridge University Press. (2024).

本研究はJSPS 科研費 24K06262 の助成を受けた。

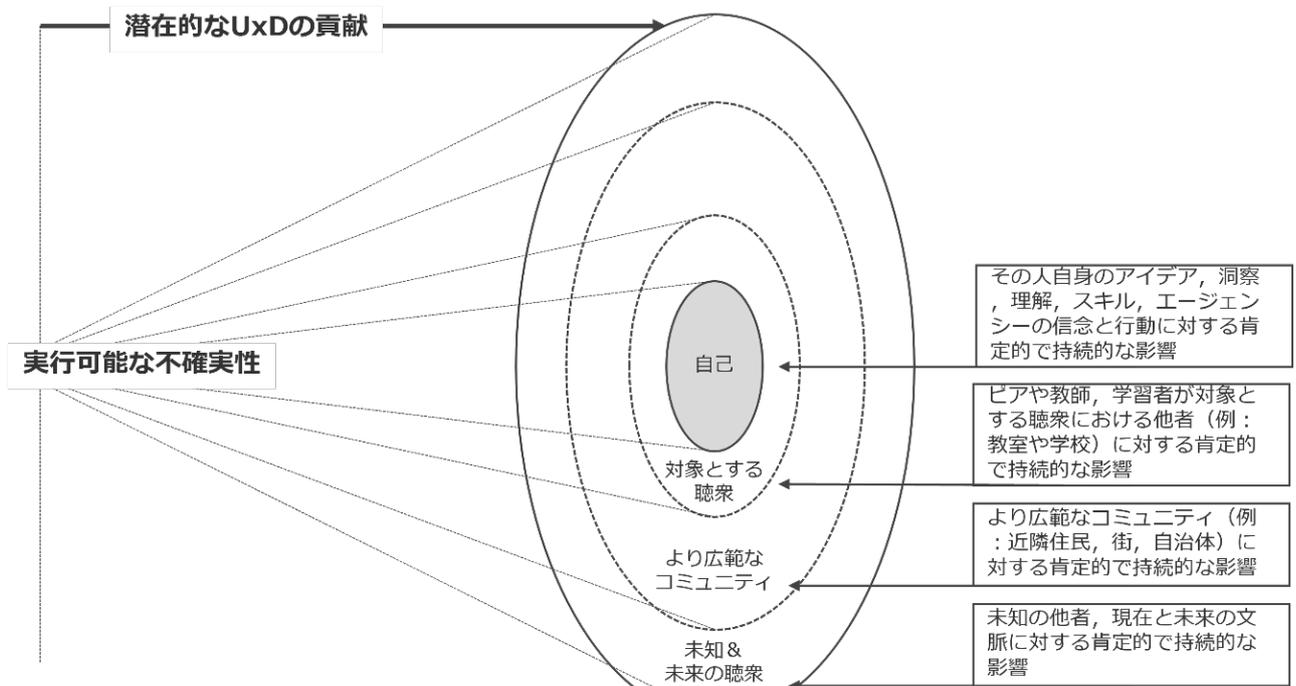


図1 貢献の円錐

※Beghetto (2024) の Figure8.1 P144 をもとに筆者作成